

質問、要望	回答
水稻について高温による品質低下の解決方法は？	公開セミナーの発表にもありました「鳥取県コメ高温対策研究会」の技術対策である土づくり、初期生育促進、水管理、栄養補給、刈遅れ防止、病害虫防除、品種転換が目下の解決方法になります。その中でも最も効果的なのが品種転換です。
食味向上の取り組みについて知りたい	食味については、適正量の施肥の検討により、収量との両立を図っています。 一般的に窒素肥料を多く与えるほど、米に含まれるタンパク質含量が上昇し、食味値は低下します。そのため、収量を確保することができ、且つ食味値も確保するというバランスの施肥量を調査することが重要となります。有機質資材については、種類の異なる牛糞堆肥や鶏糞の窒素吸収量に関する研究を現在行っており、より適切な施用量を検討することで食味値と収量の確保の両立を目指しています。
星空舞の有機栽培の研究の目的と成果の関連が見えてこなかった。慣行の施肥に有機を追加して目的が達成できるということか。	本研究は、星空舞栽培における有機質資材を用いた化学肥料の削減と地力の向上を目的としており、大きく分けるとレンゲや鶏糞は前者、牛糞堆肥は後者に寄与します。 まず、レンゲ、鶏糞については、基肥の代替として用いており、化学肥料の使用削減を行いつつ、慣行施肥と同等の収量がえられます。次に牛糞堆肥については、慣行の施肥に堆肥を追加することで、慣行と同等の収量を得つつ、さらに地力の向上が図られます。
新たな農機具開発や高性能化された場合の作業技術は誰が教えるのかを含めた手法を研究し、発表してほしい。	ご意見ありがとうございます。新たな機械や高性能化された機械についてはどうしても機械を開発したメーカーに依るところが大きくなってしまいます。例えばメーカーの協力を得てデモ機の動画を撮影し、説明をしてもらえればその様な場合においても対応可能だと思います。
水田の水管理や除草のコツを教えてください。	水田の水管理で意識するべき点はいくつかありますが、①活着～中干しまでの期間は茎数確保のため、除草剤散布以後は浅水管理を行う、②登熟期以降は米粒の充実や肥大のため、必要な水分を供給するために間断灌漑（水を張った状態と水を落とした状態を交互に繰り返す）で水管理を行い、早期落水を行わないように意識してみてください。 また、除草について、まずは圃場の水持ちや発生しやすい草種の把握を行い、その圃場に適した除草剤を適切な散布時期や使い方で散布してください。不適切な状態で使用すると、除草効果が不十分となります。特に湛水散布する剤の場合、3～4日間は湛水状態を保ち、入水は7日後以降に行うこととし、この期間中に田面が見えていたとしても、入水は我慢しましょう。雑草の取りこぼしが多数ある場合には、草種に応じた中後期剤の散布も検討してみてください。
イネゴゴま葉枯病対策	イネゴゴま葉枯病の伝染源は種もみ、前年の被害わらによる病原菌の越冬、畦畔雑草（アシカキ）です。また、老朽化水田での根腐れや肥料流亡の起きやすい砂まじりの土壌では発生が助長されます。このため、健全種子の利用を基本として、畦畔除草や土壌に不足している微量要素を補う土壌改良資材の投入、追肥による生育後半の窒素補給により発生を抑制できます。多発時は薬剤散布による防除が必要となる場合もあります。農業試験場からは土壌改良資材による発生抑制の成果情報として令和5年、令和2年に下記サイトに掲載しておりますので参考にしてください (https://www.pref.tottori.lg.jp/317295.htm)

内穎褐変病（耕種の防除と薬剤防除タイミング）	イネ内穎褐変病は「もみ」にのみ発病する細菌性病害であり、主要な伝染期間は出穂期から出穂2,3日後までです。このの期間に高温多湿な気象条件の場合、発生が多くなりやすいです。また、穂ばらみ期から穂ぞろい期のフェーン現象等による強風によって多発することもあります。 【耕種の防除】 穂ばらみ期以降が高温多雨に遭遇しないような作型（出が遅い品種の選定、遅植え）が考えられますが、近年の温暖化の影響でその効果が期待しにくい状況です。なお、作付地帯を選択できるのであれば、気温が比較的低い標高の高い山間地では発生が少ない傾向なので参考にしてください。 【薬剤防除】 本病に登録のある薬剤は多数存在しますが、いずれもイネいもち病の防除を主体とした薬剤であり、卓効を示すものではありません。このため、育苗箱施用剤による葉いもちとの同時防除および出穂期前
ばか苗病対策	ばか苗の発生は健全種子の利用を基本として、種子への感染を防ぎつつ健全苗の育苗を行うこと対策できます。ばか苗病は種子伝染するため、健全種子の利用が基本となります。自家採種種子、県外産種子は感染源となるリスクがあります。また、種子の保管は乾燥した清潔な環境下で行う必要があります。多湿は病原菌の増殖リスクを高めるとともに、稲わら、もみ殻、米ぬか等が種子への感染源になる可能性があります。育苗に使用する育苗箱、シート、浸種に使用するバケツ等は消毒するしておく必要があります。
稲こうじ病に効果のある基幹防除剤の研究（ドローンも含めて）	稲こうじ病に卓効を示す薬剤として銅剤がありますが、銅剤でドローン散布できるものはまだ開発されていません。 稲こうじ病に対して卓効を示し、さらにドローン等の無人航空機による散布も可能な薬剤の開発状況について情報収集を行い、有望な薬剤があれば本県での実用性を明らかにしていきます。
食味向上につながる取り組みや葉色とNDVIから穂肥の量やタイミングを機械的に測定できるような計算式・エクセルシートを開発してほしい。	食味については、別途回答しておりますのでそちらをご覧ください。 NDVIは水稻の葉色や生育量を面的に把握できるため、生育のムラや生育診断への活用が期待される指標となります。穂肥の量やタイミングは品種等によって変化するため一定の基準を設定するだけでは十分な精度を担保することが難しい現状です。農業試験場では汎用カメラを使用して、コシヒカリの葉色を推定する技術を公開しております。今後も生産者の方々のニーズに合わせて、リモートセンシング技術に関わる試験研究も検討していきます。
研究の成果に合わせてそのコスト指標を示してほしい。	研究成果の公表にあたっては、基本情報として新技術の経営的評価も盛り込むようにしたいと思います。
成果がなかったこともリスト程度で発表してみては？	ご意見ありがとうございます。まだ成果情報化できていない研究中の計画についても、ご紹介の時間を設けるかどうか検討させていただきます。
ほ場の水温上昇も収量・品質に影響があると感じる。適正水温で栽培するための技術を検討してほしい。	ご意見ありがとうございます。おっしゃられるとおり近年の高温条件下では水温上昇の影響も大きくなってきております。たくさん水を溜めるよりも気化熱を利用し易い足跡水程度の方がほ場の温度を下げる効果があると言われております。そうした水管理の効果について、当試験場でも検討していきたいと考えております。